

NETWORK

- 九州・沖縄一丸となって強くなった高校野球 2
- ごみ問題を考える①～水俣市、甘木市見学より 6
- 九州散歩③
 - 四百年の伝統～やきもののまち有田 8
 - 様々な問題について皆さんと一緒に考えたい 11
 - ～第1回、第2回よかネット連続セミナー

見・聞・食

- 着々と進んでいる、仙台における地域産業づくり運動 13
- 新しい高齢者住宅のかたち 14
- ～ひょうご復興コレクティブハウジング視察より
- 地域ゼミ報告 16

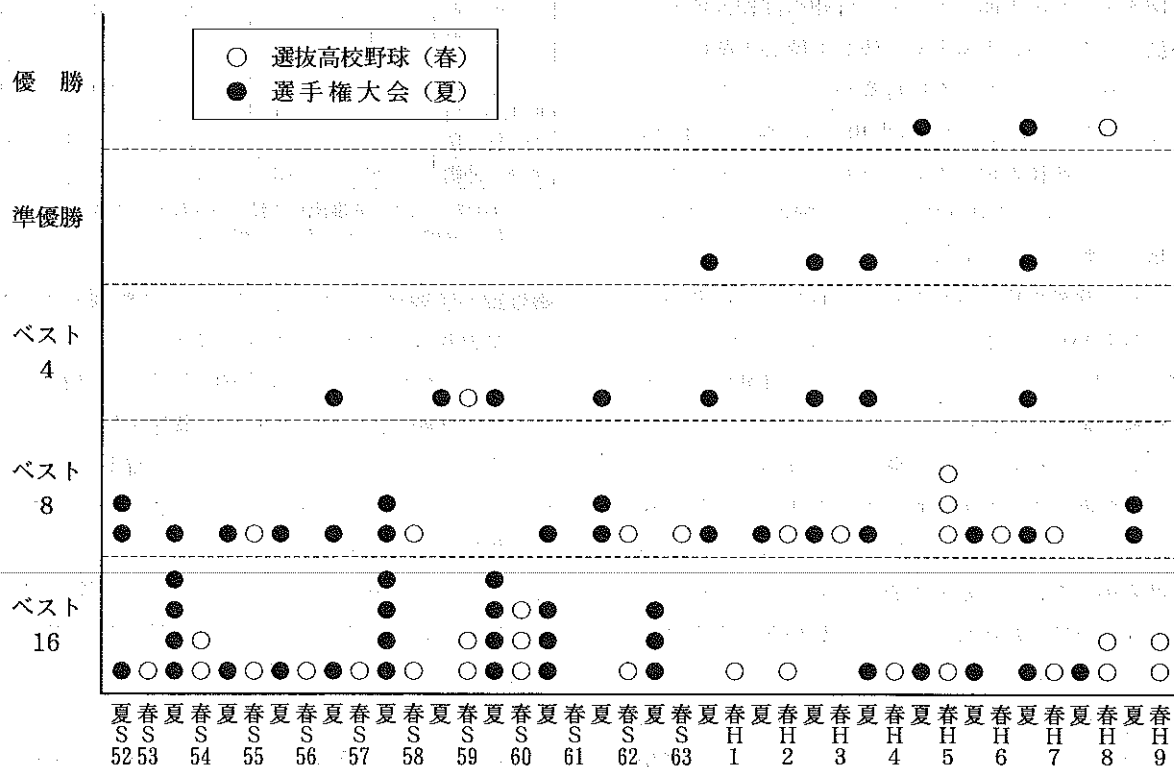
近況

- 障害者グループとのジョイントコンサート 17
- 所員近況 18

本・BOOKS

- 「つくばスマートバレー構想」 20

●ここ10年急に強くなった九州・沖縄勢の高校野球 (九州・沖縄代表校の20年間の戦績)



各大会1校につき最も勝ち進んだところに丸印

高校野球の全国大会 (春・夏の甲子園) における九州・沖縄勢は、昭和63年以降たびたび決勝戦まで進出するようになった。平成6年夏には九州勢同士の決戦 (佐賀商～樟南) まで演じている。10年以前まではベスト16に進むのがほとんどで、ベスト8が少しという状況だった。ところがこの10年間はベスト16、ベスト8を突き抜けてどんどん上へ勝ち進んでいる。この九州・沖縄勢が最近強くなった秘密は、13年前に始まった監督親睦会の交流にあった (2頁参照)。

九州・沖縄一丸となって強くなった高校野球

—— 監督親睦会の活動はまるでベンチャービジネスの見本 ——

●この10年の強さは特筆もの

九州・沖縄の高校野球の成績を示す図表を見ていただきたい(表紙)。最近の10余年の上昇ぶりはすばらしい。1994年の夏の大会では、ベスト4に佐賀高、柳ヶ浦(大分)、樟南(鹿児島)が残り、佐賀商が優勝し樟南が準優勝となった。96年の春には鹿児島実業が、92年夏には西日本短大付属(福岡)が優勝している。この10年で見れば優勝3校、準優勝4校(福岡第一、沖縄水産2回、樟南)、ベスト4が4校となっている。それ以前の10年間のベスト4が5校とは比べものにならない。これは容易なことではない。

正直いって私は、高校野球のファンとは言い難い。まして関西生まれの人間にとって、九州の高校は校名と県が結びつかないことも多く、決して関心の強い方だとは言えない。しかし、今後は変わりそうである。

そのきっかけとなったのは「九州一丸で強くなれ、監督会が支える高校野球」というテレビレポートである(97. 5. 18、これはNHK宮崎によって製作され、九州・沖縄地区で放映された)。

その日は書類を片づけながら、テレビの音を聞いていた。はじめはそれほど気にもとめていなかったが、「監督会によるネットワークによって…」、「親睦会によって交流が進み、全体のレベルアップ…」などという言葉が耳に入るにしたがって聞き耳が立ちだした。気になって新聞のテレビ欄を見ると「九州一丸で強くなれ…」とある。途端にピンときた。「シリコンバレーの技術開発の話みたいだな」と思ってしまった。唐突なようだが、日頃の私の九州に対する思いがそうさせてしまったのである。

結論を先に述べると、近畿、東海、四国などの野球どころのチームとちがって、九州のチームは、対戦相手となったチームが喜ぶぐらいのレベルであった。ところが、13年前に始まった監督親睦会を通じて交流が盛んになり、いわゆる名門校と言われていないチームも含めて、全体の力量が上がり九州全体が激戦地になった。それがこの10年の成果だということである。

夏の甲子園

第59～68回大会(S53～S62)ベスト16以降進出校数

	ベスト16	ベスト8	ベスト4	決勝進出	優勝
福岡県	5	1	1	0	0
佐賀県	2	0	0	0	0
長崎県	0	0	0	0	0
熊本県	6	4	2	0	0
大分県	6	3	0	0	0
宮崎県	5	1	0	0	0
鹿児島県	4	2	1	0	0
沖縄県	6	4	0	0	0
九州・沖縄	34	15	4	0	0

夏の甲子園

第69～78回大会(S63～H8)ベスト16以降進出校数

	ベスト16	ベスト8	ベスト4	決勝進出	優勝
福岡県	6	5	3	2	1
佐賀県	3	1	1	1	1
長崎県	2	2	0	0	0
熊本県	1	1	1	1	0
大分県	2	2	1	0	0
宮崎県	2	1	0	0	0
鹿児島県	6	4	2	1	0
沖縄県	4	3	3	2	0
九州・沖縄	26	19	11	7	2

この10年でベスト4進出は4校から7校へ、決勝進出は0から7校、優勝は0から2校へと増えている。

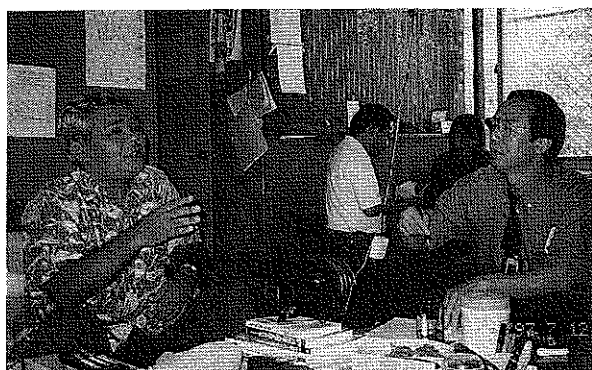
●地理的距離は仕方ない、せめて心の距離を近づけて交流試合などをしやすくしたかった

この交流会は、13年前に九州地区大会が沖縄で行われた時に沖縄水産高校の裁監督の提案で始まった。

「沖縄水産は強かったんでしょう。交流しても、自校のプラスにならないかもわからんのに、なぜ監督親睦会を提案したのですか」

「そんなことはないです、九州の学校は交流試合も簡単に行うことができるが、沖縄の学校は強い高校との練習試合をするなどということは、なかなかできないんです。せめて九州のチームと交流試合がやりやすいようになりたいと思って、まず“監督の交流から”ということをお願いしたのです」

これは、7月に裁監督に会ったときの話である。沖縄に行く機会があったので、電話で会っていただけるかどうか聞いてみた。丁度夏の甲子園の予選が始まっており、無理かもしれないと思ったが、兎に角電話して



左が沖縄水産高校 裁監督

みてからと考えたのである。

そのとき、正直に私の関心の有り様を述べた。それは、①私は高校野球にそれほど関心をもっていないが、NHKテレビの放送に興味をもった、②私は日頃、地域づくりや産業振興などに関連した仕事をしている、③その眼でテレビ放送の内容を見ると、シリコンバレーで技術が進歩し、小さい企業が力をつけ、新しい産業がどんどん展開していった時の様子に似ている、ということである。「2時以降はグラウンドにいます」ということで糸満市まで訪ねて行って話を聞いた。

「本土では東京オリンピックがあり、新幹線ができ、交流のための基盤ができて強くなり、沖縄は勝てなくなっていたのです。離島性というのは変わらないですから。沖縄は左投手がなかなか打てなかった。九州にも高速道路ができていき、沖縄は一層遠くなったようでした」

「13年前に始まったのは、まず名刺交換会です。顔つなぎです。我々の世界（高校野球の）は上下関係がきついですから、若い監督さんからは近づきにくいのです。まず顔見知りになって交流しやすいようにということです。九州大会は各県でもち回りになっているのですが、その前日に集まって親睦会をやったのです。集まる監督さんは多い時は80人ぐらいになります。九州大会出場チームの監督と主催県の若手の監督さんなどです」

「はじめに声を出して呼びかけたので、目立ちたがり屋だとか言われました。親睦会で酒を飲みながら懇談していたのですが、酒を飲むことへの批判も出てました。不謹慎だというわけです」

「2次会へ行ったり、カラオケなども行くのですか」

「いやあ、大人しく話をしていただけです。翌日から試合ですから誰も無茶はしません」

「このあたりのことをテレビ放映の中から拾ってみる

と、若い監督さんが「私は強いチームの監督と知り合うチャンスだったので名刺をもって挨拶にまわっていました。何か吸収したかった」と述べている。

この会は情報・知識の交流、練習試合の組み方などのネットワークとして極めて大きい役割を果たした。野球の技術ばかりでなく、生徒の生活指導についての悩みなどまで、若手の監督さんにとって、随分助かったと言われている。

私はインタビューのはじめに「監督会は…」と言ったところ、裁さんが急いで「監督親睦会です」と訂正した。「監督会という組織的なものを作っているわけではないんです。集まる機会（九州大会）のときに親睦の交流会をやっているだけなんです。」ということである。何かそういう感じの批判があるような様子であった。

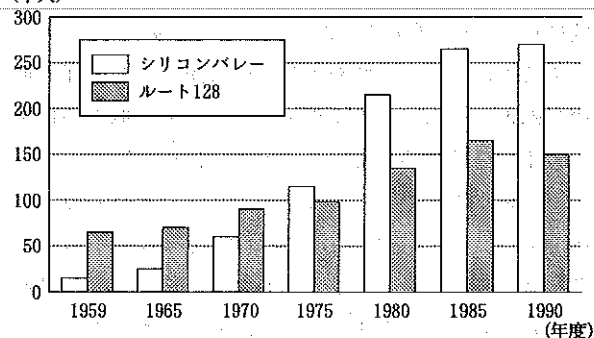
裁監督の話を聞いていると、若手研究者や大学の若手教官のほやきに似たものがある。しかしそれを果敢に克服するためにインフォーマルな交流会を始め、それによって九州・沖縄の高校野球全体のレベルアップにつないでいっている。

●自由な交流こそ進歩の源泉だということ

シリコンバレーのことについて触れておかねばならない。

「現代の二都物語—なぜシリコンバレーは復活し、ボストン・ルート128は沈んだか」という本がある（アナリー・サクセニアン著、大前研一訳、講談社）。強引にまとめると、ボストン・ルート128の企業群は自己完結型企業形態で、企業内にはヒエラルキーがあって、ヨコとの交流が出来にくい仕組みになっている。

一方シリコンバレーは、リスクをおそれない起業家精神で、仕事では激しく競争するが、職場を離れると家族ともども親しい付き合いをしており、「同じレスト



ハイテク産業総雇用者数
(シリコンバレーとルート128 : 1959~90)

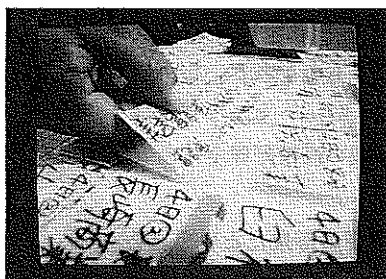
出典：「現代の二都物語」



'97. 5. 18 NHK
「ズームアップ九州、
九州一丸で強くなれ、
監督会が支える
高校野球」



監督親睦会の様子。
このあとすぐ立話
が始まり、立食パ
ーティーのようにな
るーテレビより



監督が集まって練
習試合の組合せを
つくる。弱いチ
ームも有名校と当
たるようにする
ーテレビより

ランで食べ、同じバーで飲み、同じパーティーに出かける」。また、情報交換は職場内でも競合企業同士でも行われ、技術的な問題でも頻繁に相談し合うような“技術コミュニティ”が形成されている。「技術者たちがアイデアを交換したり、うわさ話を楽しんだりする溜まり場として人気のあったマウンテンビューのバー、ワゴン・ウィールは、“半導体産業の泉”と呼ばれていた」

●オープンで、フラットで、参加型の文化

また、シリコンバレーの特色は、オープンでフラットでカジュアルな（何気ない、不規則な、普段着の、格式ばらない）企業風土にある。ヒューレット・パカード方式ということで紹介されているが、それは「共通の目的とチームワークを重視する一方で、個人の自由と自主性を積極的に応援し、ときには要求さえする参加型の経営手法である」、「ヒューレット・パカードの2人は、あらゆるレベルの従業員と、急に思い立って非公式のランチをとることにしたり、廊下で立ち話を始めたりすることがよくあった。またマネージャーたちに、毎日必ず『うろつき回って』どこかで即興の議論を始めよと説いた」と書かれている。

ここにあるのはオープンで参加型の企業文化である。

話を高校野球にもとすと、シリコンバレーに学ぶまでもなく、13年前からオープンな交流（主催県の場合はどのチームでも参加できる）があり、酒を飲みながら話し合うことによって先輩・若手の垣根を低くし、フラットな関係が強められていた。

そのことによって名門校、有力県だけでなく、各県から全国大会での優秀チームが出だしたのである。

ライバル間で情報公開するということは「出すことで、逆に自分側に新しいものを作らねばならないというプレッシャーをかけることになった」のである。

●弱いチームにも交流のチャンスがもたらされた

高校野球の世界についての事情通なら、誰でも知っていることかもしれないが、私のようなものにとって「弱い高校にとって、強いチームとの練習試合をもつことは、なかなか大変なのです」とか、プロ選手を輩出している大阪の超有名校などは「1年先、2年先まで練習試合が決まっている」、「せめて2軍との練習試合を、とって頼んでいる」などということはビックリごとであった。

高校野球の監督経験のある知人に聞いたところでは、「弱小チームの監督は肩身がせまく、若い人とベテランの上下関係もきびしいので、練習試合を組んでもらうなどは望むべくもない」ことのようなのである。

しかし監督会によるネットワークの結果、顔見知りになることもでき、ゴールデンウィークや夏休みの練習試合などは、弱いチームにもチャンスがまわるように工夫された。

例えば5月の練習試合では、鳥栖を中心とした11グラウンドで、35校・90試合が行われた。有力校のひとつである沖縄水産校は6試合が組まれ、その結果のひとつが日田高校であった。この対戦は、このようなネットワークがなければ、まず考えられない組み合わせだということである。

この話を聞きながら思ったことであるが、高校野球では、弱いチームと対戦することのメリットはないかもしれない。しかし、ベンチャービジネスの場合では決してそうではない。

そのことを強く感じた例があるので紹介する。

●ビジネスの世界での交流のメリット

私が京阪奈の関西文化学術研究都市にかかわっていた頃（1980年頃）、関西の主要企業の技術担当の役員

に、将来の科学技術についての企業としての考えを聞いてもらったことがあった。その時、何かの拍子に、「異業種交流、とくに異人種交流がいかに大切か」に話が移ってしまった。そして某大企業の技術担当専務（その企業の技術についての最高責任者）は、ふいに自分の経験を語りはじめた。

「実は私は液晶分野に会社が進出するかどうかについて決断をせまられていた時期がありましてね。毎日毎日、頭はそのことでいっぱいだったのですよ。進出するとすると、当面何10億円という投資をしなきゃならないし、すぐまた大量の設備投資が必要です。ということは、マーケットの見込みと他社との競合と同時に見込みが立たねばならんわけです。」

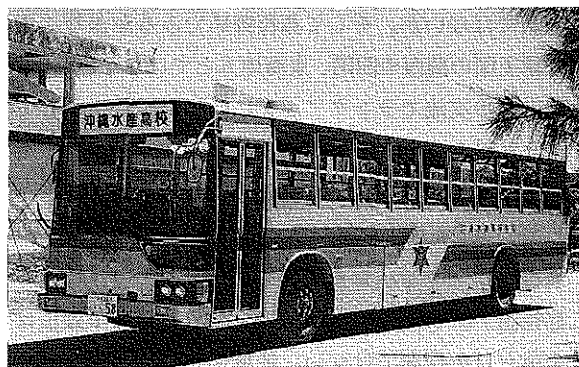
「異業種交流というか、いろんな人の集まる会合がありましてね。私はできるだけ出ることにしていたんですが、日頃から気にしているものですから、そこで何気なく、個人的な雑談の中で液晶のことを話題にしまったんです。相手は若い人だったんですが、私が『液晶などは今からどうなんでしょうね』と言ったら、相手はやおら腕時計をはずして、その裏側を見せながら『これですか』と言った。そこにはもうひとつの時計があり、それが液晶だったんです。動揺は見せませんでしたが、背中が寒くなりました。私はすぐさま液晶分野への事業展開を断念しました。どうということもない会合でしたが、そこへ出たことによって、少なくとも当面何10億円かの損失を防ぐことができたのです。人は『ヤル』という決断ばかり賞賛しがちですが、企業にとっては『ヤメル』という意志決定によってマイナスの支出を防ぐことも、同じように大切なことなのです。」

ビジネスの世界では、個別分野については大企業より小企業の方が進んでいることも多いという見本のような話であった。このあと私たちは、学研都市建設はもとより、知的ネットワークや交流の大切さについて話し合った。

高校野球でも、企業の世界とは違うかも知れないが、常に弱いチームのみメリットがあるとは言えないのではなかろうか。

●地域も元気になり、町も活性化した

枕崎市は台風とカツオで有名なところだが、近年は人口も減っているし（人口27,640人、5年ごとの人口減少率は4.3%、4.0%）、カツオの景気も悪く、元気の



交流試合で威力を発揮しているバス

ない街であった。高校野球の世界でも、3年前は無名だったが、県大会で優勝したことによって街中が元気になってきている。

街の人の声も「10年後にベスト8ぐらいになったら…」と思っていたら、3年で県大会に優勝してしまった」と言っていた。

高校が元気になれば街の人々も放っておけなくなる。雨天練習場は閉店したパチンコ店を貸してくれたし、夜間練習のための照明は電気店がつけてくれた。遠征のための費用には、街の人や企業の従業員などのカンパが集まっている。おそらく、地元の人々のビール消費量も上がっているだろう。ひょっとすると、地域の経済成長にとって少しは貢献しているかもしれない。それも、全国大会準優勝の熊本工業に、練習試合とはいえ、勝ったことによる自信が大きいにちがいない。正に「交流は力なり」である。

●ハードな基盤と交流手段と知的ネットワークがあれば、ランクアップにつながる

沖縄水産の裁監督は「監督交流会だけじゃないんです。今ではどこもバスを持っています。中古なら100万円ぐらいでも買えます。これがあると交通費が安くなります。1人1回500円ぐらいでいける。10分の1ぐらいです。それと高速道路ができて交流しやすくなりました。うちは九州へいくときも、関西へいくときもバスを持っていけます（別にフェリーで出発させておく）。あちこちの練習場へ行くのも安くて便利です。こっちの子を大勢連れて電車の乗り降りなんて、できたものではない」と話していた。

これを言い換えると、①ハードインフラとしての高速道路、②交流システムとしてのバス、③知的インフラとしての監督交流会、ということになっている。これは正に、地域産業づくり、ベンチャービジネス起

しの話ではないか。そして高校野球でみるかぎり、まず野球王国の関西や四国、東海地方ではなく、九州・沖縄内での交流でランクアップにつながった。そしてそれは九州の一部の有力県だけということにならず、全体のレベルアップになって表れていることはデータが示している。

最後にシリコンバレー優位を書いた前掲の「現代の二都物語」から引用してしめくりたい。「競争優位は一企業だけの問題ではない。地域全体の“文化”こそが決め手になる」。そして九州の高校野球はその“文化”を手に入れたのである。（糸乗 貞喜）

※P13の「仙台の産業づくり運動」も参照

ゴミ問題を考える①

～水俣市、甘木市見学より～

今年4月より容器包装リサイクル法が施行され、各自治体毎の責任とされているゴミは、その問題が益々注目されています。

ゴミ問題には大きく分けて、以下のような2つの視点があると思われます。

①ゴミになる前の問題

②ゴミになってからの問題

このシリーズでは、上記のような視点に立って、それぞれにおける先進地や、詳しい方のお話などを報告したいと思っています。

今回は、①のゴミになる前の話として、九州の先進地である水俣市と、福岡県の先進地である甘木市の視察報告をしたいと思います。

●水俣病の環境劣悪イメージを打開するために環境重視の19分別収集実施

水俣市と聞いて頭に浮かぶのは、水俣病という日本が世界中のどこに出しても恥ずかしい公害問題ですが、



大規模なストックヤードを持つ水俣市清掃センター

水俣市にはこのイメージを打開したいという思いと、環境イメージを打開するには環境で何とかしたいという思いが強くあったそうです。そのため、水俣市における環境への取り組みは並々ならぬものがあります。有機農法が盛んなことも市民の環境への意識が高い証拠だと思われます。

市のゴミの取り組みは、いたってシンプルです。同じ種類のゴミだけを一緒に集める。ゴミの種類は不燃で19種類にも及びます。この分別収集は平成5年8月より全市域で始動し、今年で5年目になります。回収されたゴミの多くは再生、再利用されています。ここまでいくと、もうゴミではないように思われます。

また、平成7年より、冷蔵庫の媒体としてのフロンガスの回収を始め、今年10月よりペットボトルも回収予定となっています。

●分別のための人件費などは増えたが、埋立量は激減
分別収集を行うことによるコスト増は否めません。分けて回収するためには、分けて運ぶための車が必要となります。

水俣市の場合は、車4台の購入費、それに乗る人（2人／台）への人件費の追加の必要が出てきました。

また、今年10月からのペットボトルの回収にあわせ、車1台（×2人）が必要となってきます。担当者は分別

表1 ゴミ排出量の推移（資料：水俣市環境課ごみ対策室）

（単位：トン）

年 度 種 類	昭和62年	63年	平成元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年
可 燃	7,294	7,378	7,539	7,663	7,700	7,964	7,462	6,856	7,061	7,281
粗大不燃	3,412	3,824	4,277	4,105	3,226	2,044	958	521	578	684
資 源	—	—	—	—	—	—	854	1,461	1,513	1,583
計	10,706	11,202	11,816	11,768	10,926	10,008	9,274	8,838	9,152	9,548

前より2～3千万円増えていると語っていました（人件費、収集車両代等により）。

しかし、それを上回る効果がありました。分別前は不燃ゴミの大半を埋立処理をしていましたが、再生、再利用することにより、埋立量のシェイプアップを図ることができました。その量については下記のような表を市の方からいただきましたので示します。

ゴミの排出量の推移をみると、平成4年には粗大不燃（粗大不燃として不燃ゴミを全て出していた）の量が2,044tだったのに対して、平成6年には（平成5年8月より分別収集開始のため）521tと約1/4に減少しています。

また、最終処分として埋立をおこなうものは、粗大不燃の破砕処理を行ったものと、可燃ゴミの焼却灰です。表1の平成8年の可燃、粗大不燃の計7,965tは処理後の1,377t（表2）となります。平成4年は約2,500tあったそうですから、約半分の量に減り、残りの半分は資源売却し、市民にお金が入り、その上、再生、再利用され環境にもやさしく、住民にもやさしいシステムになっています。

●参考にした善通寺市モデル

水俣市が分別収集を始める以前から、分別収集の先進地としてあがるところは、沼津市と、沼津市をモデルとした善通寺市でした。

水俣市はゴミ問題に取り組む前に、善通寺市を訪れ、3つのポイントをまとめました。

- ①環境モデル都市を具現化していくためには、リサイクル型社会の構築への取り組みが必要。
- ②ごみはごみを出す本人の問題であり、ごみ処理は住民と行政が一体となって取り組む課題。
- ③市民がごみの適正な処理に関わることから水俣の環

表2 最終処分の状況（資料：水俣市環境課ごみ対策室）
（単位：トン）

種 類	年 間	1日平均
資 源 売 却	1,583	6.5
埋 立 処 理	1,377	5.6
残 灰	1,083	4.4
カレット	274	1.1
瓦 礫	20	0.1
計	2,960	12.1

※1日平均は、センター稼働日数245日で算出



今年のコンテナ回収業者（甘木市総合衛生センターにて）

境問題への取り組みが始まるという共通認識を市と市民全体に浸透させることが必要。

現在水俣市では、海外からも視察が来るようになっており、福岡からも50以上の団体が視察に訪れているそうです。その中から、水俣市をモデルとして取り組んだ例として、福岡県の甘木市があります。

●県内最大の9分別収集（福岡県甘木市）

甘木市は平成7年10月、市内廃棄物業者による、他町への不法投棄が発覚し、地元紙に大きく取り上げられました。このため、早急にゴミ対策を審議し、平成8年6月より9品目分別収集に取り組みました。

この間約8ヶ月、視察に行った水俣市のように、モデル地区を設定し、徐々に分別に取り組むのがよかったのでしょうか…と担当者は語っていました。

廃棄物問題で市が叩かれていたため、住民のゴミへの関心も高く、分別に対する住民からの反対はなかったそうです。

●水俣から学んだことと、発展させたこと

水俣市をモデルとしていますが、甘木市は甘木市に合ったごみ収集のシステムを発展させています。

水俣市の19分別に対して甘木市は9分別というもの、市の状況を加味したものです。

また、水俣市では各区でゴミの担当となる世話人（リサイクル係）を班毎に当番制にしていますが、甘木市では各区で推進委員やその方法を決めています。そのため、水俣市のように順番で行う区、決まった人が行う区やシルバー人材センターに委託している区などがあります。

甘木市が取り入れた方式として、最も新しいと思われるのは、各ステーションでゴミを入れるコンテナの配布・回収を、入札によって決められた業者が行うと

ということです（水俣市の場合は、市が100%出資の財団がおこなっている）。今年は日通が行っているそうです。また、処理業者も入札方式にしています。

甘木市では入札方式にすることによって、以前は処理業者に支払っていた200万円/月が、ぐっと安くなったそうです。

●ゴミ問題を陰で支えるヤル気のある行政マン

水俣市、甘木市でお話をうかがって感じたのは、担当者が生き生きとされているということでした。

分別収集は、分別のための住民への説明会（水俣市の場合は180回程度）、分別時の指導など、住民との関わりが大きく、甘木市の担当者の言葉をかきと、「住民を動かさないといけないから金ではなく人の力がある」ことです。

両市とも環境へのイメージ面で深刻な問題があって、それを打破するための分別収集となっています。環境に優しいことをしているという意識は、住民に特別な優越感を与えるものだと思います。

住民がいい気分になって、埋立量が減る、還元金が入るなどのメリットがあれば市もいい気分になっている、このような市が水俣市、甘木市だと感じました。

（澤谷 真紀子）

九州散歩③

四百年の伝統—やきもののまち有田

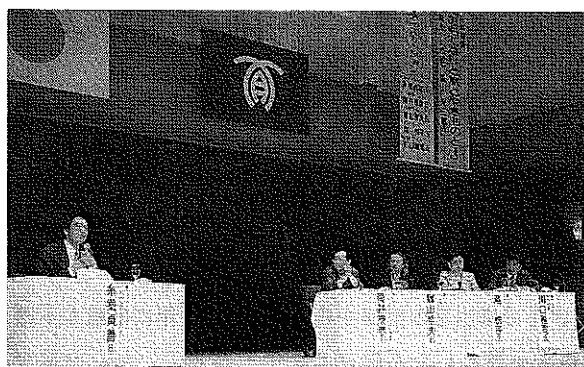
今回の九州散歩は、昨年のもてなしの世界博覧会の開催一周年記念として行われた有田町の「潤いのあるまちづくりシンポジウム」の報告を兼ねて有田のまちを紹介する。

このシンポジウムは、「もてなしのこころ」を柱に据えた、これからの有田のまちづくり活動の第1段として行われたものである。

●嵐山光三郎さんによる基調講演

基調講演は、有田が好きで学生の時から毎年訪れているという作家の嵐山光三郎氏による「おもてなしと旅とやきものと…」であった。氏のいう良い観光地とは、「観光を前面に押し出したところではなくて、自分が住んでも住みよいと思うところであり、まちが自然体であること」と述べ、よいまちの十箇条をあげられた。

1. 商店街の仲がいい。



熱い議論が交わされたパネルディスカッション

2. 住民の仲がいい。
3. 町のじいさんが元気。おじいちゃんは町の文化財
4. 町のおばちゃんが元気。おばちゃんは町の潤滑剤
5. 元気な若者がいる。
6. 町の文化財を大切にしている。
7. 川とのかかわりがある。
8. 豆腐屋がある。豆腐屋があることは良いまちであるための条件である。豆腐屋というのは、まだ薄暗い夜明け前から仕事が始まり、重労働であるにもかかわらず、一日の収入はそれほどでもない。豆腐屋が重労働に耐えてでもやっていけるのは、豆腐屋に対して明るく声を掛けてくれるような活気があるからであり、明日も頑張ろうという気にさせる。したがって豆腐屋のあるまちは良いまちであるといえる。
9. 情緒がある。
10. お祭りが好き。

8に関しては、有田には「ごどうふ」という地元の人が自慢する名物豆腐がある。

●地元が自ら考え、行動すべき

続いてのパネルディスカッションは、コーディネーターに当事務所の糸乗、パネラーには、FUKUOKA STYLE編集長・筒井泰彦氏、森博市町村館等を手がけた蟬山哲夫氏、ラジオのパーソナリティーなどで知られる滝悦子氏、地元の若手代表・川口雅司氏というメンバーであった。

糸乗の問題提起は、「有田は四百年の歴史を持つやきものの町であるが、人口減少ややきもの関連人口の高齢化などの問題を抱えている。これからのまちづくりの方向として、一つがもてなしのまちづくりであり、この観点からのまちづくりがどうあるべきか」ということであった。これに対して、次のような意見が出された。



交流会での焼き物太鼓の演奏

「有田には今のままで十分魅力があるが、今のままでダメだという危機感を持っている人がどれだけいるのか。」

「手持ちの自然風土から歴史文化、産業基盤までを全部点検して、身近にある良さを見つめなおすべきであろう」

「観光を目指すならば、宿泊、飲食施設の悪さなどをどう整備し、手薄なサービス業をどう育てていくのが課題である。」

「有田陶器市は新しい有田ブランドの発表の場であることを再認識して欲しい。」

「やきものとは切っても切れない『食』の分野に取り組むことも一つの考え。」

「有田四百年の歴史を支えてきたのは陶工。その技術を披露・伝承するためにやきもの好きの観光客を対象に体験工房をつくるのはどうか。定住人口より交流人口の拡大が大切である。」

いろいろな角度からの意見が出されたが、最終的に地元の人は何をしたいのか、地元には何があるのか、それらの資源の価値を本当に知っているのか、そして住み続けたいまちと思っているかどうかポイントであった。

シンポジウムの後、参加者の交流会が、同じ会場のイベントホールで行われた。写真の太鼓の演奏は、地元の演奏チームであるが、使用されている太鼓は有田焼である。中央の一つを除いて全て焼き物で作られており、調子をとる鐘も焼き物であった。写真が無くて残念だが、ちょうど茶碗蒸しの蓋のような形の皿を片手に2枚ずつもって、カスタネットのように鳴らしながら踊る「ちゃわん踊り」も賑やかでおもしろかった。

●原料はなくてもやはり本山

次の日の町並みウォッチングは、まちの良さを内外

の人たちに認識してもらうイベントであり、地元、外部を含めて約30名が参加した。

有田の磁器の歴史は17世紀に遡るが、朝鮮人陶工『李参平』(りさんぺい)が今の有田の中心からわずか300Mほどの泉山で陶石を発見したことに端を発する。現在この陶石はほとんど掘り尽くされたため、陶石は天草から取り寄せられているが、今でも磁器の本山はこの有田町である。

●おいしい「有田の水」ともてなし

泉山から中心に向かってあるいて数分の町家の玄關脇に昔から湧いている地下水がある。地元のおいしい酒にはほとんど使われているそうだ。案内してくれた役場の方のおかげで、冷たいその水を飲むことができた。家の人に「いつでも寄って下さい」とにこやかに応対して頂いたのが心地よかった。

●廃材利用のトンバイ塀

今回の町並みウォッチングは、通常よく通る表通りではなく、裏通りに重点がおかれていた。陶磁器の店が建ち並ぶ表通りからは想像もつかない、ひっそりとした石畳の路地である。この裏通りで目をひくのが、トンバイ塀である。ご存知の方も多いと思うが、登窯に使用されていた内壁用の煉瓦、トンバイを赤土で固めて塀として再利用されているものである。

窯を作り替える時に出る煉瓦の再利用であるが、これを新商品としての塀づくりのデザインに活用もされている。写真の左が従来のトンバイ塀で、右側が新しいトンバイ塀である。裏通りには、窯元や絵付け師の



有田の裏通り

新旧
トンバイ塀

働く場も多く、覗き込まれないように二重の塀が築かれた屋敷も見ることができる。

●川底にはべんじゃら、屋根には絵の具

町の中を流れる川の底には、小石に混じって磁器の破片をいくつもみることができる。これは「べんじゃら」と呼ばれ、窯元が多いこの辺りでは、むかしからやきものの不良品は川に捨てられていたそうである。昭和40年代頃までたくさんの「べんじゃら」がみられたが、今は河川美化運動、掃除によってぐっと少なくなっている。当時の川底がべんじゃらによって彩り豊かで美しかったのか、やきものの墓場になっていたのかは分からないが、やきものの町特有の光景といえる。川だけでなく、町家の2階に絵付けの作業場があるところでは、屋根に赤や青やらの絵の具の跡をみることができる。

●あまり人の訪れない美術館

有田陶磁美術館は、明治初期の石造りのやきもの倉庫を改築した美術館である。商工会議所の玄関脇にあり、分かりづらいかもしれない。シンポジウムでも、内部の設備の古さなどの問題が指摘されていたが、ここには17世紀の磁器創生期から20世紀に至るまでの有田焼が展示され、外国向けの指輪掛けや、髭剃りの時に使う受け皿など、滅多に見られない展示品もある。

●まちの全貌を見渡す陶祖李参平の碑

町家の続くちょうど中間辺りの角を南の方に向かって歩くと、階段の上に遮断機のない踏切があり、これを渡ると陶山神社がある。ここには「焼き物の神様」にふさわしく磁器製鳥居、磁器製のお守りがある。

ここには応仁天皇、鍋島直茂のほか、やきものに携わる人々が「陶祖」と崇めている『李参平』が奉られている。境内の階段・坂道を10分ほど登ると、突然開けて、有田を一望できる記念碑が建てられている。この町の全てを見守るような形で「李参平の碑」が立っており、これらの石は、さきほどの踏切に停車してそこから担ぎ上げてきたそうである。

●きらびやかな「輸出伊万里」

午後は、九州陶磁文化館の見学であった。やきものに全く素人でも、まちを見て有田焼の歴史の前半部分を知り、この陶磁文化館ですばらしいやきものを見学すれば、やきものをもっと知りたいと思っている人も、陶器と磁器の違いを知らない人でも、陶器、磁器だけでなく、いろいろな古来からの器の作り方が学べる。



有田古地図（佐賀県立図書館蔵）
通りを中心に商店が立ち並んでいる姿は現在でも変わらない。山手に向かって登窯がみえる。

中国が明から清に変わる頃の内乱によって中国磁器の代替品として世界を席巻することになった有田焼は、伊万里港を窓口としてヨーロッパへ進出することになったため、伊万里焼と呼ばれることになったのはよく知られているが、ここの蒲原コレクションは、東インド会社のVOCマークの入った皿をはじめ、シャンデリアや、燭台に至るまで様々な古伊万里が多数展示されているほか、柴田夫妻コレクションでは、江戸時代の有田磁器が一堂に展示されており、有田磁器の歴史の変遷を学ぶことができる。これだけでなく、九州の諸窯の古磁器の展示、九州各県を代表する陶芸家による現代陶芸も楽しめる。

●シンポジウムを終えて

ちょうど1年前の1997年7月19日に世界森の博覧会が開催され、250万人の人たちがこの地を訪れたと言われる。しかし、この250万人の人たちが、再びこの有田に来てくれるかどうかは、地元の人たちがこの一年間に何をしたか、今から何をするかにかかっていると言える。

今回のシンポジウムは、いままで言われてきた有田の問題を知り、これから生きていくための一つの方向として「もてなしのまちづくり」ということが提言された。有田を訪れる人たちにもっと良さを知ってもらうためには、地元の人たちが町をウォッチングし、有田焼やそれを生み育て世界にまで進出させた有田の歴史に自信と誇りを持つことが大切である。

その意味で、今回のシンポジウム及び町並みウォッチングはうまい仕掛けであったが、毎年開催される有

田陶器市、秋のちゃん祭りなどにやって来る多くの
人たちに、町のたくさんの良さを知ってもらおう仕掛け
づくりを今からでも取り組むべきであろう。

(小田 好一、山辺 真一)

様々な問題について皆さんと 一緒に考えたい

～第1回、第2回よかネット連続セミナー

この仕事をしていると「自分一人では解決できない、
みんなで一緒に考えないと解決できない」いろんな心
配事がふつふつとでてきます。

- ・地方財政はどうなっているか？
- ・地域の将来に向けた産業づくりをどう考えるか？
- ・今の時代に適合した地方自治体の規模というものがあるのではないか？
- ・ゴミを減らすためにはどんな取り組みが要るのか？

こうした「今、この人にこの話を聞いてみたい」テーマについて、日頃おつきあいしていただいている皆様と一緒に勉強してみたいということで、「よかネットセミナー」なるセミナーを始めることになりました。

セミナーの名称を本誌と同じ「よかネット」としたのは、いろんな方のお知恵をネットワークで繋いでいきたい、という考えにもよります。

今年6月の第1回セミナーを始めたばかりで、まだ2回開催したのみですが、これから年数回のペースで繋いでいきたいと考えています。

今回は、これまで開催してきたセミナーの様子やお話について報告します。

■地方財政は破綻するか～第1回セミナー

第1回セミナー（6月17日）は、伊東弘文教授（九州大学経済学部）に、地方財政の行く末についてお話しいただきました。演題は「地方財政は破綻するか」というもので、最初に取り上げたいと思っていたテーマの題名として申し分ないと思います。

会場のアクロス福岡円形ホールには、行政の財政担当の方を中心に、40名程が集まって、伊東先生のお話が始められました。

以下には、講演内容を簡単にまとめてみました。

〈国も赤字、国家も赤字〉

- 日本の国家財政の、債務残高ストックの対GDP（単年度）比は、平成7年現在で約90%を占めており、単

伊東弘文教授



年度GDPとほぼ同規模の借金の残高をかかえていることになる。

- こうした状況の中において、財政の大部分を国に支えられている地方自治体は全国に3,300ある。

〈自治体は役所であり、地域最大の雇用をもつ事業所にもなりうる〉

- 地方自治体は、地域によっては、その地域最大の雇用機会を与える事業所となっており、その存在が欠かせなくなっているところもある。

- 地方自治体の仕事は時代とともに大きく変化しており、社会的に取り組むテーマは移っていくべきである。

- その意味で自治体の公共サービスの領域は人々のニーズとともに、拡大していくものと思われる。しかし無限に拡大していったら、いつまでもその規模を維持していくのが望ましいかという決断はそうではない。

〈税金で公共のサービスを賄っているか〉

- 福岡県内97市町村の平均歳出額（平成7年度）を1人当たり換算でみると441千円／人であるのに対し、市町村民税は125千円／人となっている。自前で稼ぐ分は歳出額の1/4程度で、あとは地方交付税と借り入れで賄っている。

- 「サービスの目的区分と役割」「どのお金がどのサービスに帰属するか」ということの説明を市民向けにしていけることが大事（国向けには予算・決算で出来ている）である。これがないと、市民はいつまでも公共サービスに満足できないのではないか？

〈だれが破綻を賄っているのか〉

- 平衡交付金の狙いは、地方交付税の交付による地域活力へのインパクトと内需拡大である。昭和24年のシャープ勧告はこうした地方財政の健全理想を目指すものであった。

- しかし、実際に不交付団体の数をみれば、昭和32年に217団体（対全国比5.5%）あったのが、平成7年度には162団体（対全国比4.9%）に減少している。
- つまり、平衡交付金による内需拡大方策は現実的にみると破綻していることを意味する。
- 今の日本の場合、一方で、不交付団体の経済力の一部が国に吸い上げられ、もう一方で、財政の破綻した団体の穴埋めにされている状況が極端になっている。
- 47都道府県別に地方税、国税と地方交付税のバランスをみると、地域間の格差を埋めるため、一部の都市部、例えば大阪府では、地域から国に6兆円の税金を払っているが、地方交付税として戻る分は1千億円という状況になっている。

〈自分の金は自分で稼ぐを基本に〉

- まず「税金をとるのにもお金がかかる」ということをはじめ、コスト意識が行財政には必要だろう。福岡県内の97市町村で100円の税金を集めるのに全県平均で2.9円、政令市では2.0円、市部では3.0円、町村部では6.5円（中には32円かかる）かかっている。
- 民のものは民に返し、自治体サービスとして重視すべき点は何か検討する必要がある。
- 地域の経済的自立は、大規模型の経済基盤誘致策だけではなかなか達成しにくい状況にある。地域の特色にあったサービスなど、自発的・内発的な取り組みが必要になる。

■九州の知識産業の展望～第2回セミナー

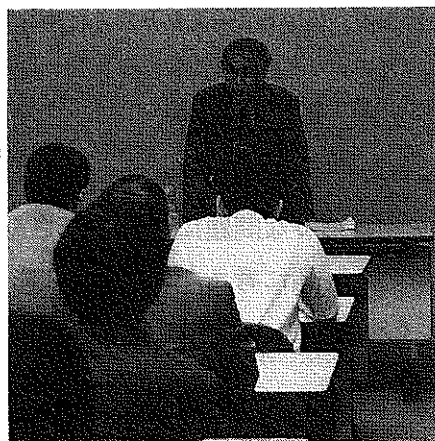
地域の将来を形づくる産業、とりわけ、時代の変化に柔軟に応じ、人々のニーズを充たし、いつの時代でも地域の基幹産業がマーケットを十分広く確保できるような産業構造とはどのようなものなのでしょうか？

第2回セミナー（7月10日）では、矢田俊文教授（九州大学経済学部）に、こうした地域づくりと産業構造の関係について、とりわけ次期全総で重視されている知識産業、知的資本について、これからの九州の「知識産業」をの展望についてお話をいただきました。

〈企業経済が潤っても、国の経済は潤っていない〉

- グローバリゼーション（世界経済化）が進む中、企業は「より活動がしやすく、より低コストな、より儲けが大きいような」環境を求めて動くようになっている。
- 今ではこうした状態がかなり進んだ結果、日本の企業は健全であっても、日本国の経済の空洞化が一層顕著になっている。

矢田俊文教授



〈なぜ今、地域で知的資本、知的産業が必要か〉

- 日本では、これまで地域産業施策といえば、農林水産業の保持か公共プロジェクトの誘致の2つが中心だった。
- しかし、食糧であれ工業製品であれ「ものづくり」そのものでは周辺国との価格競争で国際的な優位性を失いつつある。
- 一方、大規模な公共プロジェクトがこれからも同じようなペースで続いていくとは到底考えられない。
- こうした中、地域産業では「何の産業であっても、市場に合わせて新しい展開を次々に生み出せる」ことが重要になる。個別企業の盛衰はあっても、地域全体としては新しいものを生み出す産業構造づくりが必要である。
- 「知識産業」は、市場をとらえ、ニーズをもとに、新たなサービスを付加する（あるいは新しくシステム化する）ことで成り立っている産業であり、今の時代だと、例えば、新製品開発、調査・研究、情報、設計・デザイン、広告・宣伝などは知識産業に含まれる。
- 〈知識産業は質・生産性ともに高さが求められる〉
- 知識産業の成果品は、技術やサービスといった知恵の質的な高さそのものである。
- 知識産業の質的な問題は、すなわち知識産業に携わる人の問題によることとなるため、地域の知識産業の生産性の向上が単純に「人数を増やす」といったものでは達成できない。
- また、知識産業が多いからといって、地域全体の産業が豊かになるとは限らない。
- これには、地域社会の教育水準、地域の人々の問題意識の持ち方、知識産業に対する評価など、知識産業を形成する地域の「文化」が非常に重要な役割を

もつ。

(九州には知識産業のヨコの繋がりが必要)

- 実際に事業所統計調査を組み替えて、「知識サービス産業(※1)」に従事する従業者数をみると、総数で関東・関西は全国の6割を占めており、都市部と地方部の格差は非常に大きい。
- 九州の場合、知識サービス産業の集積は低いが、大学の教員・研究者・学部学生数は関東・関西に次いで高い。しかし、地域に直結した研究を進めようとする大学の研究者は少ない。むしろ、東京の方ばかり目を向いているようだ。今の状況を地域と一緒に取り組んでいるのはむしろ国公試のみといった感じである。
- 地域社会に結びついた知識産業の展開に向けて、大学や研究機関、知識サービス産業などの地域内のヨコの繋がりを充実し、集積効果を発揮できないだろうか。
- こうしたヨコの繋がりは地域産業を支えるインフラストラクチャーになると思われる。九州にはこうしたインフラづくりが重要である。

■地域の問題点に即した質問が多くみられた

これまで2回開いたセミナーでは、参加者は県内外の行政の方が多くみられました。やはり、産業と財政という「将来地域がいかに喰っていくか」という重要なテーマだけあって、参加者の方も問題意識をもって来られていたようです。

講演の後の質問では「うちはこんな問題があるのですが……」「うちのようなどころでも果たしてどんなことが……」という地域事情に即した質問が多かったのが印象的でした。

やがて状況が一変し、あらゆるものがトレンドでは捉えられない世の中になるかもしれません。こうした状況の中「次に何が大事になるか」「何もあてにできないなら、自分たちで取り組めることはないか」ということを前提に経済にしろ地方財政にしろ、考えた方がよいような気がします。

これからのセミナーですが、テーマとしては、地方分権、都市・農村の交流、高齢者介護などについて講師の方のお話を聞きたいと思っています。

「こういうテーマについて一緒に考えたい」というものがあれば当事務所までお知らせ下さい。

(小田好一、七搦かおり、尾崎正利)

※1) ここでは知識サービス産業は：情報サービス、調査・広告業、専門サービス産業、放送業、学術研究機関、教育を加えたもの

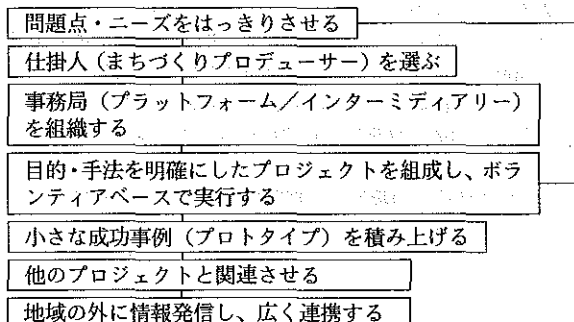
着々と進んでいる、 仙台における地域産業づくり運動

先日、東工大の増田先生の進めておられる「サイエンスパーク研究セミナー97」の仙台合宿に参加した。そこで聞いた「みやぎモデル運動」について報告する。概要は別掲の「趣意書」で見えていただくとして、私の感じたことを述べる。まず感心したことは「ニードありき」で活動していることであった。この運動は「みやぎ情報交流推進グループ(MJKS)」というプールに多様な人々が参加し、それを第3セクターの「(株)テクノプラザみやぎ」が事務局をひきうけて支援し、全体の集まり(集まるだけでなく連絡したりしながらもある)でニードを見つけ合い、それをうけとめられる技術をもったメンバーが事業化チームをつくって検討していく、という仕組みになっている。

私は10年ほど前に、関西で「地域産業フォーラム」という地域の産業づくり運動に参加したことがある。そのときは、とにかく「全員でリスクを負担して」ということで、事業内容が何も見えないうちからかなりの入会金や会費をとった。「ベンチャーにはリスクを負うことも必要」という至極もっともな考えではあったが、足が遠のく原因になったと思う。

MJKSの場合は、人々のプールとなる部分はかなりフリーな仕組み(出席ごとに1000円の会費で缶ビールを飲みながら)であり、すでに80人ぐらゐの参加がある。この中でニードを見つけたり、シードをもった人々がチームを編成して取り組んでいくので、あまり無理

しかけづくり・しくみづくり



「みやぎモデル」推進組織設立趣意書

株式会社 テクノプラザみやぎ 代表取締役社長
山本 荘一郎
みやぎ情報交流推進グループ 座長 川村 志厚

ご高承のとおり、「シリコンバレー・モデル」の推進母体である「スマートバレー公社」は、高度情報化時代におけるエコノミーとコミュニティの相乗的活性化を目指した実践活動を非営利組織として展開し、多大な成功を収めつつあります。このスマートバレー方式は、シリコンバレーウェブとも称される勢いで各地に波及し、地域変革の有力なモデルとして世界的に評価されるに至っております。

宮城県においても、シリコンバレー・モデルの研究と応用実践をとおして来るべき高度情報化社会に最適の「みやぎモデル」を創造していくことが不可欠であるとの認識のもとに、産・学・官・市民のボランティアが集まり、みやぎ版スマートバレー公社の原初的組織ともいうべき「みやぎ情報交流推進グループ（略称MJKS）」を昨年4月に結成し、「みやぎモデル運動」を推進してまいりました。

「みやぎモデル運動」は、宮城県における経済・産業領域のシーズと地域・コミュニティ領域のニーズを主として情報技術の活用によってマッチングさせ、あわせてボランティア活動や福祉等の分野にも経済原理を導入することによって、新しいビジネスの可能性を産み出すとともに地域社会がより豊かになる道を探って活動を続けてまいりました。発足以来1年の間に、西多賀プロジェクトを始め数々のプロジェクトを立ち上げ、その成果は「みやぎ情報交流推進グループ（MJKS）」による「みやぎモデル運動」として社会的にも広く認知されつつあります。

しかしながら、この「みやぎモデル運動」をさらに発展させるためには幾つかの課題を解決していく必要があります。その最大の課題は強力な推進組織を設立することです。MJKSは、現在のところ個人ベースのボランティアを主体とするフラットな自主的集まりであることから、プロジェクトの自由な発想と企画の場としては最適である反面、プロジェクト実行段階で必要となるマンパワーや資金調達面においては、プロジェクト・メンバーが所属する企業や団体等の個別組織上の制約のため困難を生ずるといった欠点があります。

株式会社テクノプラザみやぎは、当初より「みやぎモデル運動」の実質的な事務局としてMJKSを支援してまいりましたが、MJKSの組織上の課題を解決するため、今般、各界を代表する実力者の方々に参加いただいた新しい組織を設立し「みやぎモデル運動」を強力に推進していきたいと考えるに至りました。「みやぎモデル運動」はサイエンスパークの果たすべき機能と密接に関連する「地球リエゾン活動」であり、新しい組織のMJKSはその活動のプラットフォーム（推進母体）の性格をもつものであります。当社は新しい組織の事務局を正式に担うことにより、サイエンスパークの新たな展開を模索していく所存でありますので、新組織設立の趣旨をご理解賜り是非ともご参加下さいますようお願い申し上げます。

以上
平成9年4月吉日

がないように見えた。このチームのメンバーには大企業の人たちとのネットワークもあって、ものによってはそちらの力も借りている。大企業などにとっても、新製品の芽がみつければプラスになるのである。

すでに筋ジストロフィー患者のためのパソコンのマウスの開発や、高齢世帯などの外出のできない人々に対する双方向商品表示注文システムなどができている。いずれこのような動きから「一般向けの新商品」も出てくるにちがいない（テレビのリモコンスイッチも、もとは身障者用に開発されたものである）。

（糸乗 貞喜）

新しい高齢者住宅のかたち

～ひょうご復興コレクティブハウジング視察より～

阪神淡路大震災より2年半が経過した今、神戸の復興住宅として、長田区に建設された（現在入居予定者の調整中）高齢者向けの公営住宅の視察報告をいたします。

公営のコレクティブハウジングは新しい試みであるため、①従来のシルバーハウジングとの違いや、②被災地以外の地域ではどうなのか、という2点について考えながら参加しました。

以下、兵庫県のコレクティブハウジング事業について概説します。

●目的

単身高齢者が孤独に陥ることなく、積極的に共同生活の楽しみが得られるような住宅を供給する。

●コンセプト

- 共同化することによって得られる豊かな生活
- 居住者が共に支えあう安心生活
- 地域サービスとのつながりのある生活



公営住宅で初めての試み、「神戸片山住宅」

団地名	所在地	戸数	完成時期	住戸タイプ			備考
				S	M	L	
東部新都心・臨浜	神戸市中央区臨浜海岸通	44	10年度下期	32	12	-	全て高齢者向住戸
南本町	〃 〃 南本町	27	9年度下期	19	8	-	〃
岩屋北町	〃 灘区岩屋北町	22	9年度下期	16	6	-	〃
片山	〃 長田区片山町	6	8年度下期	6	-	-	〃
大倉山	〃 中央区下山手通	32	9年度下期	32	-	-	〃
金楽寺	尼崎市金楽寺町	71	9年度下期	32	22	17	Lは一般世帯向住戸
福井	宝塚市福井町	30	9年度下期	14	9	7	〃
県営計		232		151	57	24	
浜添	神戸市長田区浜添通	29	9年度下期	15	12	2	8戸は一般世帯向住戸
神戸市営計		29		15	12	2	
合 計		261		166	69	26	

(注) コレクティブ・ハウジングとは、各個人のプライバシーを確保した住戸をもちつつ、団らんや食事など、お互いに支えあう協同生活の場を組み込んだ協同居住型の集合住宅。

コレクティブハウジング事業の計画

●従来のシルバーハウジングとの比較

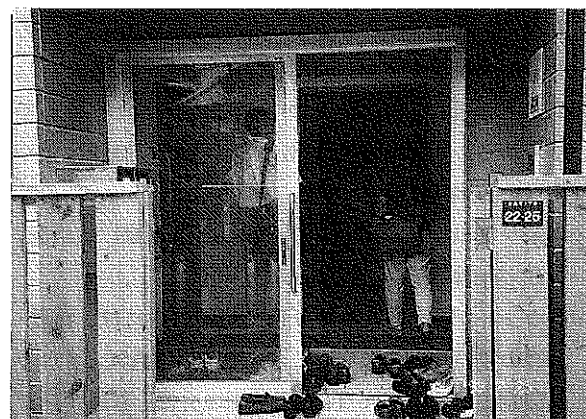
このコレクティブハウジングは、シルバーハウジングを基本フレームとしているため、類似点が多いのですが、大きな違いとして以下のようなことが挙げられると思います。

～従来のシルバーハウジングは、「LSAと入居者」、コレクティブハウジングは、「入居者と入居者」のつながりを重視～

- ・シルバーハウジングではLSAが入居者をどう深く把握するか、入居者の緊急時に、いかに迅速かつ適切に対応できるかに重点が置かれていたために、緊急通報システムや、LSAの役割について頭を悩ませていたように思います。
- ・コレクティブハウジングでは、緊急通報システムなどはシルバーハウジングのよいところを取り入れ、それよりも、入居者同士のコミュニティをいかに確保するかに重点が置かれているように思われます。
- ・そのため、ハード面では、建物には玄関は一つ、入居者は一つ屋根の下に暮らす家族のように、そこで靴を脱ぎ、スリッパに履き替えて、自分の部屋へ向かいます。また、入居者同士が語り合える家庭のリビングルームのようなスペース（「共同利用ふれあい空間」という）を確保しています。
- ・また、ソフト面では、共同利用ふれあい空間のランニングコストは入居者負担となるため、この空間の利用や備品の購入について、入居者同士の話し合いになります。

●今後の期待

コレクティブハウジングは、個人の場所（台所、風



靴をぬいで、自分の部屋に向かう

〈神戸片山住宅建築概要〉

- 建設地：神戸市長田区片山町1丁目22-25
- 敷地面積：313.7㎡
- 構造階数：木造2階建（RH工法）
- 供給戸数：災害復興公営住宅 1DK 6戸
- 交通機関：神戸市営地下鉄「長田駅」 徒歩8分
神戸市営バス「長田神社前」 徒歩3分
- 便利施設等：長田区役所 南西 0.9km
西市民病院 東 1.1km
長田神社 西 0.1km

呂、トイレは各部屋ごと）があって、集まりたい時や、人の顔が見たい時には誰かがいる場所があるという、あくまでも個人があってコミュニティがある住宅であるべきだと私は思っています。誰かがけがをしたり、病気になるなど、高齢者同士の助け合いと、地域の福祉施設や病院、ホームヘルパーの関わり等、どのようにうまくバランスをとるのかなども含め、今後の展開に期待したいと思います。（澤谷 真紀子）

地域ゼミ報告

■ハードよりソフトを重視した高齢者対策

～地域ゼミ 48 (6月12日) 池田さちよさん～

今年の2月にスウェーデン・ヘルシボリ市、デンマーク・オーフツ市サービスセンターや福祉機器会社、高齢者住宅等を視察された池田さちよさんに、北欧の高齢者対策についてお話を伺いました。

参加者との議論も含めて、以下にまとめてみました。

〈高齢者福祉施策は施設から在宅へ移行〉

- ・スウェーデンでは、福祉、医療関連の施策は、国が福祉、失業、県が医療関係、市が学校、保育、介護、看護、障害者対策で、明確に役割分担されている。デンマークは国が責任を持つ。
- ・高齢者福祉は、施設ケアから在宅ケアへと移行してきている。財政面の問題もあり、今後、施設はつくらない方向で動いている。
- ・在宅ケアは、ホームヘルパー、地域看護婦、主治医、行政が一体となって支援している。
- ・スウェーデン・ヘルシボリ市の組織の中には、看護・介護の委員会があり、ここから7つの市直営と4つの民間企業に委託して24時間体制の介護・看護サービスを行っている。サービス内容が悪ければ翌年の契約ができなくなる。
- ・オーフツ市では、重度の痴呆性老人については、治療方針を決めるため、県立の精神病院に一時入院し、入院が必要な場合は他の病院へ移る。

〈サービスセンターは地域の人が自由に出入り〉

- ・福祉機器は全てオーダーメイドで、利用者の障害に合わせてつくられている。使わなくなった車椅子なども再利用されている。
- ・地域のサービスセンターには美容室などもあって、地域の人たちも利用している。デンマークのローカルセンターには、保育所なども併設されている。週に600人の人々が集まり、食事やお茶、入所者との共同作業を行っている。
- ・高齢者もサービスを受けながら、自分ができるサービスは提供している。

〈モノづくりができなくなるとソフト面が充実?〉

- ・歩道には点字ブロックはないが、車道と歩道との段差はない。日本で車道と歩道の段差がなかったら、す

ぐに歩道に路上駐車をされてしまう。日本では道路は車優先の意識が強いのではないか。

- ・日本ではバリアフリーということで盛んに点字ブロックができているが、逆に車椅子の人にとっては障害になることもある。
- ・スウェーデンは、以前は兵器産業など大企業による社会の貢献が大きかったが、近年は不況になり財政面が苦しくなっている。日本もそのうち財政に行きづまり、モノづくりに頼れなくなって、助け合いなどソフト面で充実するような施策に変わってくるかも。

興味深かったのは、北欧は夫婦単位で生活をしており、子供は18歳になったら自立するのがあたりまえ、子供が年老いた親の面倒をみる義務もないそうです。また、スウェーデンでの女性の就業率は80%を超えており、この人たちが行き届いた福祉サービスの担い手になっているということでした。生活スタイルの違いや社会常識の違いが福祉の面にも現れているのだと思いました。

(歌丸 星子)

■ターミナルケアを考える

～地域ゼミ 49 (8月1日) 波多江伸子さん～

「(あなたはガンで、あと3ヶ月の命ですよという) 死の宣告をして欲しい人?」という波多江さんの声の後、当所の会議室に来ていた約20人全員がわらわらと手を挙げました。自分が病気にかかった時のことを思い、手を挙げた人が多かったと思いますが、私には、「もし、母の(父は死にそうにない人のため) 介護をするとき、自分が母の病気を偽ることが出来ない。絶対に本人に宣告して欲しい」という自分勝手な気持ちもありました。このような死の宣告を実際に受けた御両親と、その両親を在宅で看取った家族や仲間の話を通して、ターミナルケアについて波多江伸子さんにお話をいただきました。

〈ターミナルケアは何でもありの世界、患者が望むことを出来る限りする〉

在宅で家族を看取ろうとすると、いくつかの条件があります。

- ①本人が在宅を希望すること
- ②ケアの人手が3人以上いること
- ③医師が往診してくれること(車で約20分以内)
- ④痛みが家で克服できること
- ①について、60歳以上の男性の約8割程度が在宅を

望んでいるのに対し、女性は、自分の環境をつくるのが上手なので、病院に慣れてしまえば男性ほど強く在宅を望みません。また、男性は医師との直接交渉はしないで妻に言わせようとする傾向にあるようです。

④の痛みを克服するための薬としてモルヒネが有効です。ただ日本の場合、医者が知らない、麻薬中毒になる可能性がある、副作用の心配がある、最後の最後に使うなどの理由で、その使用を許可しない病院も多くあります。しかし、人格が変わるくらいの痛みに襲われた患者を目の前にして、「モルヒネは最後の最後に使うものだから」では家族もやりきれないだろうと思います。

〈母、父を在宅で看取って〉

6年前にお母様を大腸ガンで亡くされ、昨年お父様を前立腺ガンで亡くされました。ご両親共に共通するのは、自分が今まで暮らしていた家で、家族に見守られて一生を終えたことです。概して日本では、最後の最後になると、「家族の方は出ていてください」といわれ、次に会うときは死に顔だったということが多いそうですが、波多江さんの場合は、ご両親共に、家族と最後の挨拶を交わしたそうです。

お母様がお亡くなりになるまでのことは、その著書『モルヒネはシャーベットで』（海鳥社）の中に詳しく書かれていますので是非御一読いただきたいと思います。お父様がお亡くなりになられた時は、家族、市のヘルパー、教会（クリスチャンだったため）のボランティア、恋人のように見てくれた病院のスタッフの総勢20人程度のスタッフがいたそうです。

ボランティアの集め方がすばらしいのです。「父が最後にあなたに会いたいと言っています」といって6人のボランティアを集めたそうです。それは、波多江さんのお父様の人としての魅力だと思います。

人が死ぬ時は、その人が生きてきたように死ぬそうです。波多江さんのお父様のように、たくさんの人に見守られながら死ぬためには、今、生きている時に、家族や周りの人を大切にしていけないと感じました。また、お話の中で何度も出ていた、生きている間の死についての教育、死についての準備が必要だと思いました。

（澤谷 真紀子）

障害者グループとのジョイントコンサート

「誰もが幸せに暮らしていける地域社会づくり」を基本理念として活動が続けている福岡県グラウンドワークトラスト研究会では、地域の花いっぱい運動の支援活動などとともに、バリアフリーの社会づくりの一環として、「花のジョイントコンサート」と題した障害者グループなどのジョイントコンサートを、6月21日（土）に那珂川町のミリカローデン那珂川で開催した。

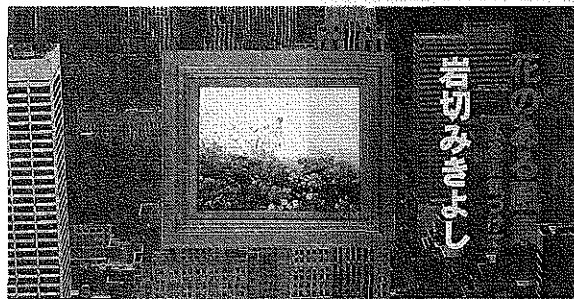
出演したのは、筋ジストロフィーの6人組で、全員車イスのまま演奏するGAOH-BAND。24時間テレビでも紹介されたことがあるので、ご存じの方も多いかも知れない。これまでもメンバーが病死したりと、壮絶なバンドなのだが、本人達は至って明るい“夢みる少年達”だった。

次に、聴覚障害を持つ人達の小倉祇園太鼓。耳は聞こえないが、太鼓の振動を肌で感じ、人の動作と合わせながら演奏する。耳が聞こえないと言われなければ分からないほどスピード感と迫りに溢れた演奏だった。

それから、宮崎から来てくれた、視覚障害と精神薄弱の人達のグループ、グレイプフルーツ。障害を持つ自分達に対する差別の目や社会への疑問をストレートに唱う曲も衝撃的だったが、ボーカルの高山こずえさんの、うたのお姉さんのような澄みわたる歌声が心に響いた。

最後に我々の仲間としても活動してくれている、岩切みきよし&大塚輝信のふたりが登場し、花の輪を広げる活動のテーマソングである「花のある風景」をみんなで大合唱した。

800席の会場は一杯とは言わないが、400人ぐらいいただろうか（一説には、延べで600～700人）。それでも十分に手ごたえを感じた。400人も集まったという



チャリティ CD 「花のある風景」 ¥1,200 で発売中

のは大変なことなのだ。介助の必要な出演者も多かったため、看護学校などのボランティアを含めてスタッフは約80人。これもよく集まったと思う。

舞台袖では聴覚障害者用に、OHPを使って歌詞や話を追っていく要約筆記があったり、司会やお話の時には手話の人が出てきたり、車イス用に固定席を一部外しておいたり、障害を持つ人たちのコンサートならではの配慮もしていた。

障害者のグループがそれぞれには活動していても、今回のようにいくつか集まってジョイントするのははじめてのことではないかと言われている。そういう意味でも、またとない感動を得たのではないかと思う。

ちなみに、このような活動に際して、先ほどの「花のある風景」のCDを販売して資金にあてているので、賛同される方は買って下さい。わたくし伊藤が承ります。

(伊藤 聡)

所 員 近 況

■ 2ノウ8サラを实践～蓑原農園

(都市から農村へ)

新聞や雑誌をみると相変わらず「田舎で農業をしたい。」という都市の住人は多いようで、都市に住む者の農業へのあこがれはますます強まっているようだ。しかし現実には「老後は田舎で畑を耕しながら過ごそう。」と夢のままでいる人や、市民農園で野菜をつくる程度で辛抱(?)している人がほとんどと思う。という私もその類の人間で、小さなベランダにプランターを置き、ちまちまと野菜を作っている。

ところが、福岡市に住む公認会計士の蓑原さんは現実的に5反という広大な農地を手に入れ、週末に農業をやっているというのだから驚いた。しかも農業に関して

草刈り前



草刈り後



はまるっきり素人だという。これは直接見てみなければ。また、5反という広さをこの目で確かめたいとも思い、農業をすることや農村に住むことに関心のある人々でつくっている「農住じねんの会」のみなさんの農業実習(草刈り)に便乗して蓑原農園(仮称)に行った。(熟年パワー草刈りで大活躍)

蓑原農園ではあまりにも元気いっぱい草が生えているのをみてびっくりした。果物の苗は、草との見分けがつかない程で、カボチャの実はいまわりの草を払いのけてやっと見えるほどであった。こんな中で、1時間も草刈りを続けると、圧倒される草の量と、照りつける太陽でやる気をなくし、木陰で休憩していた。しかし、他の人たちはもくもくと草刈りを続け、中でも若い頃に農業をしたことがある熟年層は大活躍し、手際がよく、仕上がりも美しかった。また、熟年層は若い頃に農業を体験しているということで農業に関する知識が豊富で、蓑原さんに色々アドバイスをしていた。

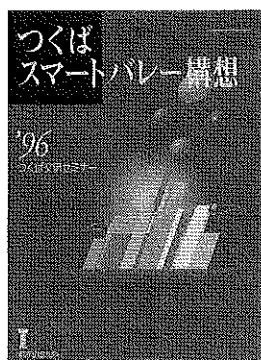
一方、蓑原さんは今まで農業と全く無縁の生活をしてきたのに、いきなり5反もの農地の経営者になったものだから、随分苦勞をなされているようだった。

(2ノウ8サラのすすめ)

蓑原さんは将来農業だけで生活をすることを目標として、現在2ノウ8サラ(2割農業、8割サラリーマン)の方法をとっている。しかし、私のように週末ちょっと野菜をつかって楽しむ程度農業をしたいという人も2ノウ8サラならできるのではないだろうかと思った。2ノウ8サラのよさは農業の知識がなくても何とか



農作業の合間の休憩



「つくば
スマートバレー構想」
'96つくば交流セミナー

筑波出版会

ご存じのように、つくば研究学園都市は、日本で最初の研究学園都市と言われ、国立の研究機関が多数集積し、これをマグネットにして、たくさんの民間研究所が集まっているサイエンスシティである。というふうに一般的に知られているが、本書の冒頭にある河本哲三氏の「つくば誕生の理念と将来像」では、結果としてのサイエンスシティであり、これからは賢い街（スマートバレーの和訳）を目指すことが必要と述べられている。そのためには、「知的興奮の場」となる「芸術」と「知」の複合組織づくりが求められている、などが述べられており、筑波研究学園都市の成り立ちから、今抱えている総括的な問題を知りたい人には役に立つ記録集である。

もともと、この本にまとめられているセミナーの目的は、タイトルにあるようにアメリカのシリコンバレーで起こっている「スマートバレー・プロジェクト」の目指す産・官・学・民のジョイントによる地域活性化の方策（ジョイント・ベンチャー方式と言われている）のあり方の紹介と筑波での可能性を議論するためのものであり、結論を出すためのものではないが、一時期の産官学の交流がなかなかできなかった時代から、産学官という一つの社会と地域コミュニティとの交流が必要な時代になったという認識がされている。しかし、末尾に出ているセミナー参加者の意見にも見られるように、シリコンバレー・モデルと言われるための地域づくりではなく、もっと歴史・風土を認識した上での方策を議論すべきであるという指摘は、まさにオンラインの地域づくりへの取り組みを示唆しているものである。

（山辺 真一）

第3回よかネットセミナー開催のお知らせ

テーマ：「福岡県、福岡市も要る？要らない？」
～分権・行革のオールターナティブ～

次回よかネットセミナーの準備を下記の要領で進めております。次回のテーマは、地域の自立を進めるに当たって、戦略に応じて自治体の果たす役割を柔軟に考える適正規模のようなことについて、皆様と一緒に考えたいと思っています。

お問い合わせの方は当事務所の尾崎、小田までご連絡下さい。

記

日時：平成9年9月16日（火）18:00～20:00

講師：今里 滋 教授（九州大学法学部）

場所：アクロス福岡 607会議室

（尾崎 正利）

編集後記

九州・沖縄の高校野球が強くなったと理由に、監督の交流が大きな役割を果たしている。同じ分野の人々の情報交流が、互いを刺激し、切磋琢磨を生み出した顕著な例である。

約10年前に始まった九州北部学研構想でも研究者間の競争と連携、交流による切磋琢磨のための知的インフラづくりが柱となっていた。ようやくその芽が出てきている。

（べ）

よかネット NO.29 1997. 9

（編集・発行）

（株）九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-942-5732

名古屋事務所 TEL 052-265-2401

東京事務所 TEL 03-3226-9130

